

琴馬亭曲

二完枝邦

青空文庫

きのう一日、江戸中のあらゆる雑音を掻き消していた近年稀れな大雪が、東叡山の九つの鐘を別れに止んで行った、その明けの日の七草の朝は、風もなく、空はびいどろ鏡のよう澄んで、正月とは思われない暖かさが、万年青の鉢の土にまで吸い込まれていた。

戯作者 げさくしや 山東庵 さんとうあんきやうでん 京伝は、旧臘 くれ の中から筆を染め始めた黄表紙「心学早染草」の草

稿が、まだ予定の半数も書けないために、扇屋から根引した新妻のお菊きくと、箱根の湯治場廻りに出かける腹を極めていたにも拘らず、二日が三日、三日が五日と延び延びになって、きょうもまだその目的を達することが出来ない始末。それに、正月といえれば必ず吉原にとぐろを巻いている筈の京伝が、幾年振りかで家にいると聞いた善友悪友が、われもわれもと押しかけて来る接待に悩まされ続けては、流石さすがに夜を日に換えて筆を執る根気も尽き果てたのであろう。「松の内ア仕様がねえ」と、お菊にも因果を含めるより外に、何んとする術もなかった。

が、松まつが取れたきょうとなつては、もはや来るべき友達も来尽してしまった肩脱けから、

やがて版元に重ねての催促を受けぬうち、一気呵成に脱稿してしまおうと、七草粥がゆを祝うとそのまゝ、壁に「菊軒」の額を懸けた四畳半の書齋に納まって、今しも硯すずりに水を移したところだった。

「ぬしさん」

障子の外から、まだ廓さと言葉をそのまゝの、お菊の声が聞えた。

「ほい」

細目に向けた障子の隙間から、顔だけ出したお菊の声は、矢鱈やたらに低かった。

「お人が来いしたよ」

「え」

京伝は、うんざりしたように硯の側へ墨を置いた。

「誰だい。この雪道に御苦労様な。——」

「伺うのは初めてだといいしたが、二十四五の、みすぼらしいお人でありんす」

「どツから来たといった」

「深川とかいいなんした」

「なに、深川。そいつア呆れた。——仕方がねえ。そんな遠方から来たんじゃ、会わねえ

訳にもゆくめえ。直ぐに行くから、客間へ通しときな」

「会いなんすか」

「面倒臭えが、いやだともいえめえわな」

それでも京伝は、一行も書き始めないうちでよかった、というような気がしながら、お菊が去ると間もなく、はんでん 絆纏を羽織に換えて、茶の間兼用になっている客間へ顔を出した。

客間の敷居際には、お菊がいった通り、無精髻を伸した、二十四五の如何にも風采の上がない骨張った男が、ひだ 鬢切れのした袴はかまを胸高に履いて、つつましやかに控えていた。

「お前さんかね。わたしに用があるといいなさるなア」

京伝の言葉は、如何にもぶつきら棒だった。

「はい、左様でございます。わたくしは、深川仲町裏に住んで居ります、ばきん 馬琴と申します若輩でございますが、少々先生にお願いの筋がございまして、ぶしつけ 無躰ながら、かよう 斯様に早朝からお邪魔に伺いました」

「どんな話か知らないが、そこじや遠くていけねえ。遠慮はいらないから、もつとこつちへはい 這入んなさるがいい」

相手が、風采に似気なくいんぎん 慇懃なのを見ると、京伝もどうやら好意が湧いて来たのであ

ろう。心もち火桶を相手の方へ押しやって、もつと近くへ寄るように勧めた。

「ではお言葉に甘えまして、お座敷へ入れさせて頂きます」

馬琴と名乗る若者は、ここで一膝敷居の内へ這入ると、また更めて頭あたらたを下げた。

「その頼みの筋というなア、一体どんなことだの」

「外でもございせんが、この馬琴を、先生の御門下に、お加え下さる訳にはまいりませぬ
まいか」

「やつぱりそんなことだったのか」

何か期待していた京伝は、これを聞くと、吐き出すように失望の言葉を浴びせた。

「はい」

「はいじゃアねえよ。改まって、願いの筋があるといいなさるから、また何か、読よみ本の種にでもなるような珍らしい相談でもすることかと思つたら、何んのこたアねえ、すつかり当が外れちやつた——そりやアまあ、弟子にしてくれというんなら、しねえこともないが、第一お前さん、そんな野暮な恰好をして、これまでに、黄表紙か洒落本の一冊でも、読んだことがおあんなさるのかい」

「いけません」

馬琴は、飽くまで、石のように真面目だった。

「どんな物を読みなすった」

「まず先生のお作なら、安永七年にお書卸しの黄表紙お花半七を始め、翌年御開板の遊人三幅対、夏祭其翌年、小野篁伝、天明に移りましては、久知くちまめどり満免登里、七笑顔当世姿、御存商売物、客人女郎不案配即席料理、悪七変目景清、江戸春一夜千両、吉原楊枝、夜半の茶漬。なおまた昨年中の御出版は、一百三升芋地獄から、読本の通俗大聖伝まで、何ひとつ落した物のないまでに、拝読いたしてまいりました」

「うむ、そうかい」

聞いているうちに、いつか京伝の膝は、火桶を脇へ突きのけて、座布団の上から滑り落ちていた。

「よく読んだの」

「はいおかげさまで。……」

「しかし、現在お前さんは、何をして暮しているんだの」

「只今は、これぞと申すこともいたしては居りませぬが、曾てはお旗本の屋敷に奉公いたしましたり山本宗英やまもとそうえい先生の許に御厄介になつて、医術を学んだこともございます」

「ほうお医者さんの崩れかい。それじゃその道で、おまんまは食べられるという訳合か」
「さア、そうまいれば、不足はないのでございますが、宗仙そうせんという名前は貰いましたものゝ、まだまだ生きた人間を診察いたしますことなどは、怖くて、容易に手出しは出来ませぬ」

「あツはツはツ」と、京伝は初めて屈托なさそうに笑った。「こいつアいい。医者の名前まで貰いながら、生きた人間が診みられねえとは、変った人だ。——だが、何んだぜ。生きた人間を診察出来ねえようじや、到底戯作の筆は把とれアしねえぜ」

「そりやまたなぜでございます」

「積つても見るがいゝ。この世間の、ありとある幸不幸を、背負しよつて生れて来た人間を、筆一本で自由自在に、生かしたり殺したりしようというのが、戯作者の仕事じゃねえか。

それだのにお前さん、生きた人間は怖いなんぞと、胆ツ玉の小さなことをいつてたんじや、これア見世の出しようがねえやな」

「ど、どういたしましたして」馬琴はあわてて遮った。「そんなんじやございません。生きた人間と申しましたも、患者、つまり病人を診るのがいやだと申しましたんで。……なアに、筆でやりますことならば、二日や三日寝ずに通しましても、決して辛いとは思やアしませ

ん。どうかこの上は、人間一人を助けると思し召して、先生の御門下にお加え下さいますよう、お願い申し上げます」

「ふゝゝ」京伝は安親やすちかの蘭彫のある煙管きせるを無雑作に掴んで、火鉢の枠をはたいた。「人間一人といいなさるが、読本書きになったからって、何も救われるたア限るまい。それどころじゃねえ。戯作なんてもなア、ほかに生計たつきの道のある者が、楽しみ半分にやるなアいが、こいつで暮しを立てようツたつて、そううまくは問屋で卸しちやくれねえわな」

「お言葉じやございますが、この馬琴は、戯作を、楽しみ半分ということではなしに、背水の陣を布しいて、やって見たいと思つて居りますんで。……」

「折角だが駄目だ」

「駄目だと仰しやいますと」

「人間、食わずにやいらねえからの」

「ところが先生、わたくしは、食わずにいられるのでございます」

「何んだつて」

「もとより生身を抱えて居ります体、まるきり食わずにいる訳にはまいりませぬが、一日に米一碗に大根一切さえありますれば、そのほかには水だけで結構でございます。——ど

のような下手な作者になりましたも、米一碗ずつの稼ぎは、出来ないことはありませんまい」
馬琴の、底光のする眼を見詰めていた京伝は、その木像のような面に彫きざまれている決意の色を、感じないわけには行かなかった。

「本当にやる気かの」

「三日三晩、一睡もしずに考え抜いた揚句、お願いに参上いたしましたやつがれ、毛頭嘘偽りは申上げませぬ」

「よかろう。それ程までの覚悟があるなら、やって見なさるがいゝ。しかし断っておくが、わたしやついぞこれまでに、弟子と名の付く者は、只の一人も取ったことはないのだから、新らたにお前さんを、弟子にする訳にやア行かねえよ」

「じゃアやつぱり、御門下には加えて頂けませんので。……」

「元來絵師と違って、作者の方にや、師匠も弟子もある訳のもんじゃねえのだ。己が頭で苦心をして己が腕で書いてゆくうちに、おのずと発明するのが、文章の道だろう。だからお前さんが、ひとかどの作者になりたいと思つたら、何も人を頼ることアねえから、おのが力で苦心を刻んでゆくことだ。そいつが世間に容れられるようなら、お前さんに腕があるという訳だし、こんなもなア読めねえと、悪評判を立てられるようなら、腕のたりねえ

証拠になる。——どつちにしても、師匠に継すかるとか、師匠の真似で売出そうとか考えたら、それア飛んだ履き違いだぜ。——いくたりの知己ある世かは知らねども、死んで動かす棺桶はなし。つまり戯作者の立場はこれだ。判ったかの」

「はい」

馬琴は力強く頷うなずいて、嬉しそうに京伝の顔を見上げた。

「その換かわり、弟子にはしねえその換り、お前さんが何か書き物をしたら、見てくれるとうんなら、必ず見てもあげるし、遠慮のない愚見も述べて進ぜる。が、これはどこまでも師弟の立場からではなくて、友達としてのつきあいだ。それでよかったら、気の向いた時は、いつでも遊びに來なさるがいゝ」

「何んとも恐れ入りました。では今後は、御迷惑でも、屢しばしば々御厄介になることゝ存じます。——そのお言葉で、馬琴、世の中が急に明るくなったような気がいたします」

「昔ツから、盲目の蟋蟀こおろぎという話がある。あんまり調子付いて水みづ瓶がめの中へ落ちねえよ
うに気をつけねえよ」

「うふふ。——その御教訓は、いつまでも忘れることじやございません」

馬琴は、それでも初めて、固い顔に微笑ほほえみを見せた。

漸く風が出たのであろう。軒に窺のぞいた紅梅の空高く、凧たこの唸うなりが簫ふえのように裕ゆたかに聞えていた。

二

「兄さん」

お菊が馬琴を送り出して、まだ戻って来ないうちから、そこへ這入って来たのは、弟の京山だった。

「おゝ、お前どこにいたんだ」

京伝は、自分より七つ下の、やりて婆のようにひねくれた京山を、温かい眼で見上げた。「あつしやア縁側にいやしたのさ」

「じゃア今の、馬琴という男を見ただろう」

「見たどころじゃござんせん。あいつのせりふも実アみんな聞きやしたよ」

「ほう、そうか。しかしおれもこれまで、弟子にしてくれといって来た男にや、勘定の出来ねえくらい会ったが、今の馬琴のような一徹な男にや、まだ会ったことがなかった。書

いた物を見た訳じゃねえから、どうともはつきりやアいえねえが、ありやアおめえ、うま
く壺にはまつたら、いゝ作者になるだろうぜ」

「ふん、馬鹿らしい」

京山はてんから、鼻の先で消し飛した。

「何が馬鹿らしいんだ」

「だつてそうじゃげせんか。あんな鬨いわしの干物のような奴が、どう足掻あがいたつて、洒落本
はおろか、初午の茶番狂言ひとつ、書ける訳はありますまい。——あつしにや、あんな男
につまらね愛想を云われて、喜んでる兄さんの氣組が、いくら考えても判らねえから、そ
いつを聞かせて貰いにめえりやしたのさ」

「慶三郎」

京伝はたしなめるように、弟を見守つた。

「ふん」

上戸の京山は、大方縁側でゆうべの残りを、二三本空けていたのであろう。酔えば必ず
する癖の上唇を頻しきりに舐なめずりながら、京伝の方へ顎を突出した。

「おめえまた、正月早々、いつもの癖が始まつたな」

「癖はござんすまい。あんな干物の草稿を見てやろうなんて、つまらねえ料簡が、どこを押しゃア兄さんの肚はらから出るんだか、あつしゃアそいつが訊きてえだけの話さ」

「人のことを、矢鱈にくさしたが、その癖の止まねえうちは、おめえにやいつんなつても、ろくな物ア書けねえだろう。——なる程、あの馬琴という男ア、干物のような風采にや違えねえ。おいらも初手に一目見た時にや、つまらねえ奴が舞い込んで来たもんだと、内心腹が立つたくれえだった。だが、一言喋るのを聞いてからは、なかなかの偉物だということが、直ぐにおれの胸へ、ぴたりとやって来た。そういつちやア可哀想だが、おめえんぎ、足許へもおツ付く相手じゃねえ。この二三年面倒を見てやったら、きつと、あつと驚くような大物を、書き始めるに相違なからう。その時になって、眼が利かなかつたと、いくら悔んでも、もう間に合わねえぜ」

「冗、冗談じゃアねえや。あんな唐変木に、黄表紙が一冊でも書けたら、あつしゃア無え首を二つやりやす。——鹿しか爪つめ爪つめらしく袴はかまなんぞ履きやアがって、なんて恰好だい。そいつもまだいいが、兄さんが、何か読んだかと訊いた時の、あの高慢ちきの返事と来たら、あつしゃア向うで聞いてて、へどが出そうになりやしたぜ。まず先生のお作ならから始めやがって、安永七年のお書卸しの黄表紙お花半七、翌年御出版の遊人三幅対」

「止しねえ」

「だって、この通りじやげえせんか。天下に手前程の学者はなしと云わぬばかりの、小面の憎い納り様が、兄さんの腹の虫にや、まるツきり触らなかつたとなると、こいつア平賀源内のえれきてるじやアねえが、奇妙不思議というより外にや、どう考えても、考えられねえ代物でげすぜ」

「もういゝから、あつちへ行きねえ」

京伝は、危く振り上げようとした煙管を、ぐつと握りしめたまま、睨み付けるように京山を見詰めた。

「聞かねえうちア、滅多にやこゝア動きませんよ。——あんな干物野郎が、あつしよりもずんと上の作者だといわれたんじや、猶更立つ瀬がありませんや。——もし嫂ねえさん。使いだてしてお気の毒だが御輿を据えて、聞かざならねえことが出来やした。ここへ一合、付けて来ておくんなせえやし」

「慶さん、何んぞます」

馬琴を戸口まで送つたまゝ、今までわざと避けていたお菊は、京山に名を呼ばれて、ぬつと丸まるまげ鬚の顔を窺かせた。

「一合お願い申しやす」

「おほ、御酒でありんすか」

「左様」

「御酒なら、わたしが酌しいす。向うのお座敷で飲みなんし」

「そうだ」と、直ぐに京伝は相槌を打った。「馬琴の座つてた後じゃ、酒を飲んでもうまくなかろう。それにおいらは、蔦屋が催促に来ねえうちに、心学早染草の、書きをながざならねえんだ。飲みたかつたら、お菊に酌をさせて、いつまでも飲んでるがいいわな」
そういつて立上ろうとした京伝の袂を、京山はしっかりと掴んだ。

「兄さん。ちよいと待つて、おくんなせえ。たった一つ、訊かしてもらいたいことがあります」

「おめえの酔が醒めた時に、聞かしてやる」

「冗談じゃねえ。あつしやア酔つちや居りやせんよ。——あの馬琴という男より、たしかにあつしの方が、作者は下でげすかい。そいつをここで、はつきり聞かして貰いてえんで……」

「腹は一つだが、おめえはこの京伝の、義理のある弟だ、出来ることなら、嘘にも下だた

アいたかねえ。が、書いた物を見るまでもなく、おめえと馬琴とじゃ、第一心構えに、大きな違いがありやアしねえか。これアおいらがいうよりも、おめえの肚に聞いて見たら、いつそ判りが速かろう」

いらいらした京伝の言葉の中には、それでも皮肉に生れ付いた弟を憐れむ気持が、如何にもよく現れていた。

が、これを聞くと同時に、京山の顔には、見る見る不快な色が濃くなつて行つた。

「よく判りやした。あつしやアこれから先、あの干物の出入するこの家にや、我慢にもいられやせんから、あいつが来る間は、ここの敷居は跨またぎますまい」

「もし、慶さん。——」

お菊の止めるのも聞かずに、そういう切つた京山は、いきなり自分の居間へ取つて返して、硯と筆とを風呂敷へまるめ込むと、後をも見ずに、小庭口から、雪のおもてへと突ツ走つてしまつた。

「ぬしさん。——」

しかし京伝は、お菊の声も耳に入らぬらしく、じつと腕組したまま、おのが膝の上を凝視していた。

「ぬしさん。——」

「うむ」

「慶さんは、どこへ行きなんす」

「どこへも行きやアしめえ」

「でも、あゝして出て行きいたからは、滅多に帰つては来いすまい。わたしが傍に附いていながら飛んだ粗相、面目次第もありいせん」

「来たばかりのおめえが、心配することアありやアしねえや。負け嫌いのくせに、本を漁ろう考えもなく、ただ酒ばかり飲んで、月日を後へ送つてる。同じくらいの年恰好でも、馬琴とは天地の相違だ。可哀想だが、ちと腹を立てさせた方が、後々の為めにもなるだろう。つまらねえ心配はやめにして、鬢びんの乱れでも直すがいいわな」

京伝はことさら弱気を見せまいと、何気なくお菊にいいおいて、独り四畳半の書齋へ這入つて行つた。

（理りたろう太郎はわるきたましいにいぎなはれ、よしはらへ来り、すけんぶつにてかへらんと思ひしが、仲の町の夕けしきをみてより、いよくゝわるたましいに気をうばはれ、とある茶屋をたのみて三浦屋のあやし野といふ女郎をあげてあそびけるが、たちまちたましいてん

じやうへとんで、かへることをわすれ、さらに正気はなかりけり)

草稿は、ここで筆が止っていた。

机の前へ坐つた京伝は、いきなり筆を把つて、直ぐその先の文句を綴ろうとしたが、前の二三行を読み返しているうちに、雨雲のように、あとからあとからと頭に湧いて来るのは、黄表紙の文句ではなくて、今し方、腹立ちまぎれに出て行つた、弟京山の身の上だつた。

いつとはなしに、曲りくねつた根性に育つて来た京山を思う時、常に京伝の胸に浮ぶのは、はじめて父母と共に、この銀座二丁目に移つた、その翌年の正月の出来事に外ならなかつた。

京伝が十四、京山は七つだつた。父の伝でんざえもん左衛門は、家主になつた最初の新年とて、町内を回礼せねばならなかつたが、従者を雇う錢がなく、それがために京伝は挟はさみばこ箱を肩にして父の後に従い、弟はまたその後について、白扇を年玉に配つて歩いた。

「兄ちゃん。おいらアお腹なかが痛いから、もういやだ」

十軒ばかり歩いた頃、こういつて京伝を顧みた京山の眼には、涙さえ浮んでいた。

「辛抱しな。もうあと半分だ。その換り家へ帰つたら、おいらがおつかあに凧を買つて貰

つて、揚げてやる」

「風なんか見たかねえから、早く帰りてえ」

「おめえがいまやめると、お父つあんが困る。いい子だから、もう少し配ってくんない」

それでもなんでも、腹が痛いといひ出して京山は、何んとなだめすかしても承知する様子がなくそのうち次第に顔色が蒼ざめた京山は、もはや口をき聞く元氣もなくなって、遂に道端の天水桶の下へ屈んでしまったのだった。

回礼は中途で止めにして、京山はそのまま家に連れ戻された。

火鉢の抽斗ひきだしの竹の皮から、母の手でまつ黒な「熊の胃」が取出されると、耳搔みみかきの先程、いやがる京山の口中へ投げ込まれた。京山は顔を紙屑しごのようにして、水と一緒に咽のどの奥へ飲み下した。

「にがい。——」

「我慢しろ。おめえが腹痛はらいたを起したのが悪いんだ」

頑固な父は、年賀を中途で止めにした腹立たしさも手伝ったのであろう。笑顔ひとつ見せずに、こういって額へ八ふたしきの字を寄せた。

それでも京山の腹痛は二時ふたしきばかりのうちに次第におさまって、午少し過ぎには、普段

通りの元気に返っていた。が、父は要心のためだといって、今度は茶碗へ解とした「熊の胃」を、京山の枕許へ持つて来ていた。

「苦くても、我慢してもう一度飲むんだ」

京山は怨めしうらそうに父を見上げたが、叱られるのを知って、拒むことも出来ず、ただ黙って頷いた。

「兄ちゃん」

父が去つてしまうと、京山は京伝と熊の胃とを見くらべながら、小声で訴えた。

「おいら、苦いから、もういやだ」

「いけない。飲まないと、あとでお父つあんに叱られるよ」

「もうお腹は癒なつたから、飲まない」

そこへ次の間から父の咳せき払いが聞えた。と、その刹那、突如として京伝の指は茶碗を掴んだ。そして苦い熊の胃は、忽ち一滴も余すところなく、京伝自身の喉のどを通して、胃の腑へ納まったのだった。

次の瞬間、果して父は障子を開けていた。が、茶碗の中に薬のないのを見ると、再び黙って頷いたまま、部屋の方へ戻って行った。

「兄さん」

固く手を握りしめた弟の眼には、熱い涙が溢れていた。同時に京伝の胸にも、深く迫る何物かが感じられた。

いま筆硯をふところに飛出して行つた弟の身の上に、十七年の歳月は夢と過ぎたが、しかも夢というには、余りに切実な思い出ではなかつたか。

「あいつの心に、おれの半分でも、あの時のことが蘇ってくれたら。……」

京伝は、ひそかにこう呟きながら、十日近くも手にしなかつた、堅い筆の穂先を噛んでいた。

三

「ふふ、京伝という男、もうちつと気障気たつぶりかと思つたら、それ程でもなかつた。あの按配じゃ、少しは面倒を見てくれるだろう。こいつを機に、戯作で飯が食えるように漕ぎ着けざアなるまい——まず正月早々、今年ア恵方が当つたぞ。——」

深川仲町の、六畳一間の棟割長屋に、雪解に汚れた足を洗つて、机というのも名ばかり

の、寺子屋机の前に端然と坐つた馬琴は、独りこう眩きながら、瘦馬のようにニヤリと笑つた。

「だが京伝は、うまいことをいやアがつたな。あんまり調子付いて、盲目の蟋蟀のように、水瓶へ落ちねえようにするがいい。——あれにやア、猫を被かぶつて出かけたおれも、ちつとばかりぎよツとしたぞ。これで二三日経つたら、また出掛けてつて、井戸水の一つも汲んでやるんだ。そうすりやア深川あたりに、独りで暮してもつまるめえ。なんなら遠慮なしに、家へ来ていたらどうだと、そういうに極つている。何しろ、飯は一日に一碗でいいといつといたんだから、一月食つても三十杯だ。他の居候の三日半の食くい扶い持ちで、おれくらいの学者が一月飼つておけるとなりやア損得そんとくずくから考えても、損にやなるまい。それでも、置いてさえくれりやア、こっちは大助りだ。第一、これから先食わずにいるよな心配は、金輪際なくなるし、その上当世流行の、黄表紙書きのこつは覚えられるという一挙兩得。どっちへ転んだつて損はねえ大仕合か。待てば海路の日和とは、昔の人間にも、りこうもの 伶俐りこうもの者ものはあつたと見える。——」

三日三晩、眠らずに考え抜いた揚句出かけて来たど、もつともらしいことを、京伝の前ではいつたものゝ、実は馬琴はゆうべし方、痛い足を引摺つて、二た月余りの、ばいぼくしゃ 売ばい卜ぼく者しゃ

の旅から帰つて来たばかりであつた。

品川を振り出しに、川崎、保土ヶ谷、大磯、箱根。あれから伊豆を一廻りして、沼津へ出たのが師走の三日。どうせこゝまで来たことだからと、ぜいちく 笠竹と天眼鏡を荷厄介にしなから、すんぶ 駿府まで伸して見たのだったが、これが少しも商売にならず。漸くはたご 旅籠と草鞋わらじ だけだ。何を、どうやら一杯に稼いで、当るも八卦当らぬも八卦を、腹の中で唄に唄つて、再びこの長屋へ舞戻つた時には、穴銭がたつた二枚、財布の底にこびり附いていただけだつた。

ゆうべは、疲れ果てた足を、煎餅布団に伸した、久し振りの我が家の寝心地が、どこにも増してよかつたせいか、枕に就くとそのまゝ眠りに落ちたので、実をいえば今朝方かわや 厠へ起きるまでは、これから先の暮し方など、とやこう考えていた訳ではなかつた。

それを、誰れが貼つたのやら、ふと、長屋の厠の壁押えに、京伝作の「江戸生えどうまれうわきの 艶氣か 樺ば 焼やき」の二三枚が貼り附けてあつたところから、急に思い付いたのが、京伝へ弟子入の一件であつた。

もとよりきらいな道ではなかつた。が、戯作で身を立てようとは、きょうがきょうまで考へてはいなかつた。

行けばきつと、こつちの風体を見て、この男に戯作の筆は把れやアしめえ、と考へた挙

句、京伝はこれまで黄表紙の一つも読んだことがあるかと、訊くに相違あるまいと思つた馬琴は、まだ夜の明けないうちに、あわてて長屋を飛び出すと、雪の中を跣足のまゝ、まづ通油町の耕書堂と鶴仙堂へ飛んで行つた。こゝの主人あるじじゆうざぶろう重三郎きえもんと喜右衛門の丹念は、必ずや開板かいばん目録こしを拵らえてあることを、考えたからであつた。

果せるかな、両軒共に、己が見世の開板目録を備えて、田舎への土産の客を待つていた。家へ取つて返す道々にも、馬琴はその目録を、眼から離さなかつた。おかげで危うく、魚河岸歸りの武蔵屋の荷に、突当りそうになつたのを避けは避けたが、一張羅の着物は、腰のあたりを泥だらけにされてしまつた。——京伝を訪れた時、襷切れの袴を着けていたのは、まさしくそれがためだつた。

それ程熱心に読んで来たせいであろう。長屋の敷居を跨いだ時には、馬琴は両目録中の京伝の著作は、年代順に暗記してしまつていた。

だから京伝が「洒落本の一つも読みなすつたか」と訊いた、あの時の馬琴は、内心しめたと、ひそかに腹の中で手を拍たつていたに相違なからう。

「この長屋中の人達にも、当分会えなからう。だが、厄介者が一人減るんだ。喜んでくれるかも知れねえ」

時々はお医者への代りもしてくれる、調法な人だとは思っているながら、半月も一月も家を空けたりいるかと思えば、夜夜中でも本を読むか、字を書いている変り者の馬琴には、流石に金棒引の連中も、嫁一人世話しようという者がいなかった。が、男世帯の不自由には、いずれも同情していたのであろう。時々芋が煮えた、目刺が焼けたと、気はこゝろの少しばかりでも、持つて来てくれる世話焼は二人や三人ないでもなかった。

寺子屋机の前に、袴も取らずに坐つていた馬琴は、何んと思つたか、急にその場へごろりと横になると、如何にも屈托なさそうな欠伸あくびをした。

「何かうまい物が、腹一杯食つて見てえな。二三日して、京伝の家の居候になりやア、盗み食いをしない限り、腹一杯は食えねえことになつてるんだ。——だが、銭はなし。米はあるが虫ころげだし、せめて久し振りで鰯の顔ぐらい、見せてくれる親切な人ア、長屋中にやアねえものかなア」

「もし、瀧沢さん。お客様がお見えなさいましたよ」

「えッ」

馬琴はこの声を聞くと、起き上り小法師のように、古畳の上へ起き直つた。

「どうもこりやアお上さん、お世話様でげした」

そういう声に、馬琴は聞き覚えがなかった。が、そのまゝではいられなかったと見えて、土間から油障子の外へ首を伸した。

「おいでなさいまし」

入口に立っていた男は、「ふん」と鼻の先で顎を掬った。

「お前さんは、さつき山東庵へおいでなすった、馬琴さんでげしようね」

「はい、わたくしが、お尋ねの馬琴でございます」

「あつしやア京伝の弟の、京山という者さ」

「あゝ左様でございましたか。存じませぬことゝて、これはどうも御無礼いたしました。

——御覽の通りの漏屋ろうおくではございますが、どうか、こちらへお上んなすつて下さいまし」
 横柄な態度から察しても、これはてつきり、京伝の使いとして、きょうからでも山東庵へ来るようにと、その言伝ことづつてに來たのだと、馬琴は早合点した。

「折角だが、上つて話をする程の、大事な用じやアねえんで。……」

「どのような御用でございましょう」

「おめえさんに、もう二度と再び、銀座へは来て貰いたくねえと、その断りに來やしたの
 「い」

「えッ」

「どうだ。こいつアちったア身に沁みたろう。——ふゝゝ。おめえのような、そんな高慢
ちきな男ア大嫌えなんだ」

吐き出すようにこういつた京山は、仲蔵なかぞうもどきで、突袖の見得を切った。

馬琴は、薄気味悪くニヤリと笑った。

「そりやアどうも、わざわざ御苦労様でございました」

「なんだって」

「御苦労様でございましたと、お礼を申して居りますんで。……この雪道を、わざわざお
いで下さいませんでも、それだけの御用でしたら、今度伺いました時に、そう仰しやっ
頂きさえすりや、それで用は足りましたのに、却って恐縮で、お詫の申しようもござい
せん」

「そんな氣永に、待つていられるかい。それに第一、おめえを嫌いなゝア、兄貴じゃなく
つておいらなんだ」

「これは面白い。では京伝先生は、別に何も仰しやっただという訳じゃございませんので。

「……」

「兄貴がいおうがいうめえが、おいらがいやならおんなじこった」

「どういたしまし。それア飛んだ御料簡違いでございましょう。わたくしは、何もお前さんの門弟になりたいとは、夢にもお願いした覚えはありません。京伝先生のお弟子にして頂きたいのがかねてからの心願でございました。こりやアいくらお屠蘇の加減でも、つまらない見当違いの矢を、向けておいでなさいましたな。まったくそんな御用なら、上つて頂くにも及びますまい。どうかさつさとお帰んなすつておくんなさいまし」

「帰れといわれなくつても、誰がこんな薄汚ねえ家に、いつまでいられるかい。——土産のしるしだ取つてきねえ」

京山はこういつて、蜜柑箱に一杯詰めた馬糞を馬琴の膝許へ叩き付けるが否や、如何にもさばさばしたように笑いながら、一目散に、路地の入口へ走つて行つた。

座敷一杯に散らばつた馬糞を、暫し黙つて見詰めていた馬琴は、突然、今までにないような愉快な声を揚げて、わツはツはと笑いこけた。

「あいつ、延喜えんぎのいゝことをしてくれたもんだ。新年早々黄金饅頭を撒き込んでくれるなんざ、ふだん女郎の尻を撫でてるだけのことアある。——よし、今度京伝を訪ねる時にや、これをこのまゝ土産に持つてツてやるとしよう。だがあいつ、京伝の文句じゃねえが、下

手な戯作の一つや二つ書いたからって、あんまり調子付くと、今に水瓶の中へ飛び込むぜ」
若い馬琴はもう一度、盲目の蟋蟀のたとえを思い出して、大の字なりに寝ころんだまゝ、
大きな笑い声を天井へ浴せかけた。

青空文庫情報

底本：「昭和のエンタテインメント50篇（上）」文春文庫、文芸春秋

1989（平成元）年6月10日第1刷

底本の親本：「オール讀物 増刊号」文芸春秋

1988（昭和63）年7月

入力：網迫、大野晋

校正：山本弘子

2008年5月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

曲亭馬琴

邦枝完二

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>